

封建制の危機の時代にあたる14～15世紀のヨーロッパ世界は、深刻な政治・経済・社会的危機に直面し、それを背景にキリスト教徒のユダヤ人観も根底的に変化した。ユダヤ人はキリスト教社会の破壊をもくろむ悪魔の手先、イエスを殺害した「神殺しの民」とされ、物理的手段（暴力）によるユダヤ人政策が追求された。中世ヨーロッパの主要なユダヤ人居住地となったスペインやドイツ（前者のユダヤ人はセファルディーム、後者のそれはアシュケナジームと呼称された）も例外ではなく、ユダヤ人街のゲットー化、反ユダヤ暴動、ユダヤ人追放が相次いだ。スペインでは15世紀半ばに「判決法規」が出され、ユダヤ人の「血統」につながるコンベルソ（改宗ユダヤ人）の都市官職保有さえ問題となった。

こうした歴史的前提の上にカトリック両王は、1480年に近世的異端審問制度を導入し、1492年にはユダヤ人追放令を発したのである。ローマ教皇の承認を受け、王権の主導下に樹立された異端審問制度は、コンベルソの「真の改宗」を目的とした国家と教会の組織的対応を意味し、キリスト教徒民衆の強い支持を受けた。4ヶ月以内の改宗か追放かの二者択一を迫ったユダヤ人追放令も、ユダヤ人の追放に主たる目的があったのではなく、ユダヤ人とコンベルソの「真の改宗」を目指したものであった。それは言語や宗教、地方特権によって分断されたモザイク国家スペインの政治・社会統合を進める上で、不可欠の政策でもあった。ユダヤ人追放令により、国王側近の有力ユダヤ人を含む多数のユダヤ人が改宗する一方、7～10万のユダヤ人がポルトガル、オスマン帝国などに亡命し、地中海と大西洋沿岸の諸都市にユダヤ人共同体を再建した。1492年のユダヤ人追放は、地中海世界を伝統的居住空間としたセファルディームが、従来の居住空間を越え、大西洋世界へと進出する契機ともなったのである。15～16世紀にはドイツでも、アシュケナジームのポーランドやリトアニアの追放が生じており、1492年のユダヤ人追放は全ヨーロッパ的規模での追放の一環にすぎなかった。

14～16世紀にスペインやドイツを追われたユダヤ人は、16世紀末～17世紀に西ヨーロッパ世界に再び還流する。宗教戦争の行き詰まりと伝統的社会・宗教規範の動揺、重商主義政策が政策転換の主要因であった。三十年戦争に関与したイギリス、フランス、オランダは、スペイン帝国の打破と国内経済の振興などを目的に重商主義政策をとり、ロンドン、ナント、ルーアン、ボルドー、アムステルダムなどにユダヤ共同体が再建された。17世紀前半のスペイン宰相オリバーレスも同様であり、ポルトガル系コンベルソに様々な特権を付与して、マドリッドやセビーリャに誘致した。ヨーロッパ全域に展開するスペイン軍への資金と兵站確保を確保し、スペイン帝国を維持するためには、有力コンベルソの資本とネットワークをぜひとも必要としたからである。オリバーレス失脚と共にコンベルソ誘致策は頓挫するが、異端審問所が隠然たる勢力を保持していたスペインで、一時的とはいえ、ポルトガル系コンベルソが誘致されたことは注目してよい。東地中海と東欧でスペインや

オーストリアと激突したオスマン帝国も、ユダヤ人の持つ軍事・産業技術、ネットワークに着目し、早くからユダヤ人誘致を積極的に進めた。こうした誘致政策の結果、16世紀のイスタンブルは、セファルディームを中心に約4万人のユダヤ人を擁する世界最大のユダヤ人居住都市へと成長した。

本報告の主対象であるセファルディームは、オスマン帝国の首都イスタンブル、サフェド、フェズ、アムステルダム、ブラジルのレシフェなどに、スペインのユダヤ人共同体と親近性の強い共同体を再建した。彼らは人頭税の支払いや現地法の遵守を条件に、在地権力から信仰の自由と自治権を認められ、ユダヤ人共同体評議会を中心に共同体を運営した。だが共同体評議会は、国際商業や金融業などに携わった有力ユダヤ人とラビ、在地権力側近の宮廷ユダヤ人の手にほぼ独占され、有力ユダヤ人による寡頭支配が再現された。共同体評議会は裁判権や課税権を行使し、共同体の平和維持に努めると共に、税の一部を内部留保し、シナゴークや学校、墓地、施療院などの共同体施設の維持費用にあてた。ユダヤ人の多数を構成したのは、在地商業や手工業に従事しつつも、共同体行政から基本的に排除されたユダヤ人民衆であり、慈善に頼る貧民も少なくなかった。社会・経済格差に加え共同体内部では、宗教儀礼を異にするセファルディームとアシュケナジームの対立、来住セファルディームと先住ユダヤ人の軋轢、改宗を拒否したユダヤ人と再改宗したコンベルソの確執も表面化した。しかし16~17世紀を通じ数的にも社会・経済的にも優位を占めたのは、来住セファルディームであり、イスタンブルやフェズの先住ユダヤ人は彼らに同化された。17世紀に西ヨーロッパ最大のユダヤ人共同体を組織したアムステルダムでは、セファルディームとアシュケナジームは別個の共同体を組織し、シナゴークも別々であった。

前掲諸都市のユダヤ人はこうした内部対立を含みながらも、共同体構造と在地権力の保護に支えられ、また親族関係や兄弟団などの多様な社会的結合に依拠しながら、地中海と大西洋を越えたネットワークを構築した。ポルトガル系の有力コンベルソでユダヤ教に再改宗した後、イスタンブルを拠点に「商業帝国」を築いたナシ家は、これを代表するものである。カナリア諸島やセビーリャ、リスボンのコンベルソも、このネットワークの一環に組み込まれ、これを通じてヒト、モノ、カネ、情報の移動が活発に展開された。セファルディームにとって、とりわけ重要であったのは大西洋砂糖貿易であり、スペイン、ポルトガルの商慣習や言語への習熟が彼らの優位を支えた。17世紀の主要な砂糖生産地であったブラジルのレシフェへの進出、カナリア諸島のコンベルソとの取引も、砂糖貿易と密接に関連していた。砂糖貿易と共にユダヤ人が大きな影響力を行使したのが、新興産業の印刷業であり、サフェドで開始されたセファルディーム文化とアシュケナジーム文化統合の試みは、印刷技術を使って、各地のユダヤ人共同体に伝えられた。追放を機に日常言語と『タルムード』解釈を異にするセファルディームとアシュケナジームは、法規範や生活規範を共有し始めるのである。